

趣味の効用



良永裕佳子

京都大学大学院工学研究科合成・生物化学専攻
[615-8510] 京都市西京区京都大学桂
助教, 博士(工学).
専門は有機合成化学, 高分子合成.
<https://suginome-lab.sbcchem.kyoto-u.ac.jp/>
member/yoshinaga/

<https://researchmap.jp/70973585>

物心ついたあとぐらいから、将来の夢は小説家だと言ってきた。しかし自分の発想の貧困さに早々に見切りをつけ、今度は漫画家やデザイナーを目指した。しかし中学校の級友にものすごくデッサンの上手い子がいて、またまた諦めた。何か「創造的」な仕事に憧れていたのではないかと思う。その後は順当に学校の勉強に精を出し、将来どうしようかと思っていたが、大学教員になり分子をデザインし創り出す仕事に就くことができた。ここまで導いてくださった方々に感謝申し上げたい。

小さいころから創造的なものに憧れる一方、自分の無力さを感じてきた。小説家を断念したときに感じたのは、「以前読んだ小説にどうしてもひきずられてしまう」癖である。これを克服するにはやはり自分の引き出し、人生経験なんかが必要なのだと思う。当時小学生の自分の引き出しなんて家族が誂えてくれた価値観と限られた経験でしかなく、またそんなに本の虫というわけでもなく読書経験も未熟だったため、もしあのまま小説家を本気で目指していたらどうなっていたかなとたまに妄想する。最近、小説ではないがとある一般書の執筆に携わらせていただく機会があった¹⁾。やはり何かしらの文章を書くことは、向き不向きは別としても楽しいものであると改めて感じた。これは自己を表現することの充実感みたいなものだと思う。小学生の自分と比べると表現したい自分の中身がきちんと増えているようで少し安堵している。

いやしかし、日頃感じているのは合成化学者としての私の分子設計における発想の安直さだ。結局のところ私はやはりアイディアマンにはなれていないのである。だが策が尽きればデッドエンド、なんとかしなければいけない。学生のときは深夜の研究室での妄想時間が楽しみだったが、最近はそんな深夜の静かな時間をとることが難しくなり、慌ただしい日常の中でどうするか。

改めて考えてみると私にとっては、自宅と研究室の閉じた世界から頭の中だけ抜け出すことが大事になっている気がする。一般論的にも脳の思考回路が普段と違うつなぎ方になったときに新しいアイディアが出やすいとされる。というわけで私が実践している「普段とは少し違う気分になるための習慣」を勝手ながら紹介したい。

1) テレビ番組「日曜美術館」(NHK, Eテレ)

日曜日の朝、なんとか寝床から起き出して、この番組をつける。全国の美術館の展示を学芸員や専門家とゲストが一緒に回り、作品の背景や魅力、見方の例を紹介している。最近印象的だったのは宮脇綾子氏のアップリケ作品群だ。布ハギレを素材に身近な静物がとびきりチャーミングに表現される。身体の疲労をソファで癒しながら世界中の作品や作者の思想に触れられる、何にも代えがたい贅沢な時間だ。

2) (たまの) 読書

普段は忙しさを言い訳に本が読めない人間である。しかしたまに本を読むと読書の効用の一つである、気づかなかつた考え方や価値観に気づけるということが本当に実感できる。少し前にブレイディみかこ氏の『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』を読み、自分と地続きに多様な価値観が存在していることにはっとさせられた。こんな風にベッドに寝転がりながらも新しい自分になり、少し違う気分になれるのはすばらしい。

3) 音楽を聴きながら散歩

言葉では表現しづらいものの、音楽もどこか違う世界へ連れて行ってくれる何かだ。理論は詳しくないが「こんな気分になりたいときはこの曲」という区分が自分の中にある。どんな曲でも好きだが、最近流行のシティポップなるものは結構好みである。今っぽくて昔っぽい、そんな不思議な感覚で、あとは純粹にCoolだ。そして夕暮れの京都市街を大学のキャンパスから見下ろしながら研究に関係することもしないことも夢想しつつ散歩できる時間はとっても貴重で、そんな時間を大事にしたい。

ただの個人的でありきたりな趣味の話になってしまったが、こうしてみるとやっぱり私って人間なんだなあと思う。今後多忙でお仕事ロボット化することがあっても、こんな時間をなんとか捻出することが仕事につながるとたまに思い出して頑張っていきたい。

最後に、現環境で自分が仕事を続けさせてもらっていることに改めて感謝するとともに、本原稿を書く機会を与えてくださった先生方と、私のとりとめのない文章にお付き合いいただいた皆様にお礼申し上げます。

文 献

- 1) 宇田亮子, 三枝栄子, 良永裕佳子著, “めくるめく元素。”, 明日香出版社 (2025)